ISSN 0912-7402

第66号：2019年3月

NEWSLETTER

～ 水を守り　湖を救う ～

公益財団法人　国際湖沼環境委員会（ILEC）
本ニュースレターには、英語版もございます。

第17回世界湖沼会議（いばらき霞ケ浦2018）

2018年10月15日から19日までの5日間、茨城県つくば市にて、第17回世界湖沼会議（WLC17）が開催されました。霞ヶ浦を抱える茨城県が同会議を主催するのは２回目で、23年ぶりとなりました。

「人と湖沼の共生-持続可能な生態系サービスをめざして」のテーマで開かれた同会議は、参加者数延べ5,500人、参加国・地域は約50ヵ所に及ぶ大規模な国際会議となりました。開会式では、秋篠宮ご夫妻の御臨席に加え、国内各省庁・市町、並びに国際組織等から来賓を迎え、約1,000人の参加がありました。茨城県の大井川和彦知事、ILECの竹本和彦理事長からの主催者挨拶の後、秋篠宮殿下からのお言葉を賜りました。また、国際連合環境計画、国際環境技術センター所長のキース・アルバーソン氏からは、水質、統合的水資源管理および湖沼生態系サービスに関する議論への期待が示されました。

プレ会議となる学生会議も含め、期間中、メイン会場となるつくば国際会議場では、政策フォーラム、国内外の湖沼セッション、分科会などが行われ、17日には、霞ヶ浦コースと北浦・涸沼・千波湖コースに分かれてのエクスカーションも催されました。また、今回の独自企画として、「霞ヶ浦セッション」が行われ、霞ヶ浦流域の県政、国政、農業、漁業、観光業、市民団体などの代表者からの事例発表や、パネルディスカッションが繰り広げられました。

閉会式前日の夜には、参加者交流会が開かれ、地元産の食材を使った色とりどりの料理を楽しみながら、各国の参加者達が和やかな時間を過ごしました。途中、全ての発表者の中から、優秀発表賞の表彰があり、口頭発表者６名とポスター発表者11名がそれぞれ受賞しました。

今回の湖沼会議では、様々な所で、“連携の重要性”という言葉を耳にしました。世界湖沼会議を契機として、様々な連携が提案されるのは大きな前進といえるでしょう。専門家の方も、一般の参加者の方も、会議上で知り得た新たな情報をきっかけに、湖沼流域や様々な環境問題について更なる興味を持っていただければ、湖沼会議の開催意義ともなります。最後になりましたが、主催頂いた茨城県、共催省庁・自治体・各団体並びにご協力いただいた全ての皆様に厚くお礼申し上げます。

今号のトピック

- 第17回世界湖沼会議（いばらき霞ケ浦2018）
- 国内外湖沼セッション
- 学生会議
- 分科会
- JICA-ILEC研修履修者の集い
- 閉会式（いばらき霞ケ浦宣言）
- 元JICA研修員からの便り（メキシコ）
- 科学委員からのメッセージ（オランダ）
- 国際コロキアム（世界湖沼会議サイドイベント）
- ILEC科学委員会総会を開催
- ILECはJICA理事長賞を受賞
- ILECの活動概要（2018年度）
- 第18回世界湖沼会議は2020年にメキシコで開催
- ILEC新役員紹介

国内外湖沼セッション

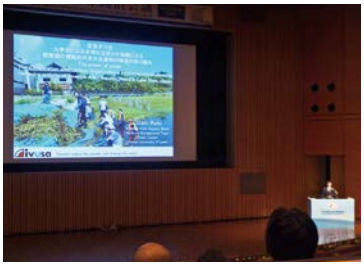
国外湖沼セッションでは湖沼流域管理をめぐる取組の経緯と現状及び今後の展望としてオセアニア、アフリカ、ラテンアメリカにおける事例が以下のように紹介されました。

- オセアニアを含む世界の湖沼・湿地はいずれも急速な劣化傾向にあり、幅広い連携が必要である。
- アフリカ大地溝帯における湖沼群は小さな外力が増幅して大きな影響を及ぼし、長期的な生態系回復の取組には国の政策に統合的湖沼流域管理(ILBM)を取込むことが重要である。
- メキシコの大湖沼チャパラ湖の課題は深刻だが、地域連携による地道な取組が進められており、その中で統合的湖沼管理（ILBM）が重要な役割をはたしてきた。

パネルディスカッションでは、統合的湖沼流域管理(ILBM)の仕組みの中には生態系サービスの回復プロセスが反映されており、引き続き多くの事例を積み重ね、幅広く成果を共有していくことが重要であるとまとめられました。

国内湖沼セッションでは、国内湖沼の環境問題解決のため、流域内連携や流域間連携を推進するために、国内の主要な湖沼流域の市民、行政、研究者および企業等が活動内容や施策等について、それぞれの取組を発表し、意見交換をしました。

滋賀県に関連した活動として、NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）の琵琶湖オオバナミズキンバイ対策チーム長が、学生を中心とした琵琶湖での外来水生植物除去活動の取組を紹介しました。この活動は2009年に琵琶湖でオオバナミズキンバイが発見され、約7年間で30万㎡まで増殖し、2014年に特定外来生物に指定されたことに対し、「学生の力で琵琶湖を守りたい」との学生たちの想いから始まりました。



今後も、外来水生植物の問題の早期発見と早期除去の体制をつくり、完全除去を目指していると発表されました。

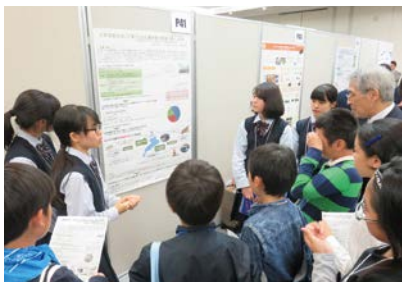
学生会議

10月14日(日)、次世代を担う青少年の水環境に関する意識向上と身近な湖沼等を誇りに思う郷土愛の醸成を図ることを目的に、世界湖沼会議のプログラムの一つとして「学生会議」が開催されました。

この学生会議では、国内外より800名の学生たちが集結し、小・中・高の３つの部に分かれ、「自然のめぐみを未来につなぐためにはどうしたらよいか」（小・中学生の部）、「人と湖沼の共生を目指すために、自分たちに何ができるのか？」(高校生の部）をテーマとし、水や湖沼に関する研究や取組についての発表やディスカッションを行いました。

小学生の部には、滋賀県より「ラムサールびわっこ大使」として活躍する８名の児童（５・６年生）が参加し、「活動を通して出会った漁師や研究員の方々は、びわ湖のことが大好きで、びわ湖の水や生き物を護るために、活動や研究をされています。びわ湖が好きな人が増えれば、びわ湖を守るために活動を起こす人も増えます。だから、自分たちがびわ湖のすばらしさを見つけ、その大切さを皆に伝えていきたい。」と発表しました。

この意見は、小学生の部の学生会議総括に盛り込まれ、翌日に開幕した世界湖沼会議の開会式の場で報告されました。



学生たちの総括は次の通りです。

- **小学生の部**　『この学生会議のようなイベントを各地で開催し、湖沼が好きな人や関わろうとする人を増やすことが大切』
- **中学生の部**　『あたりまえにある自然のめぐみの大切さを知ってもらうなど、人々の意識を変えるための「認知」、同じ気持ちをもつ仲間の輪を広げる「協力」、継続して環境保全活動に取り組んでいく「参加」が必要』
- **高校生の部**　『今の活動を継続し、次の世代へ着実につなげていくことが、一番重要』

本会議での学生たちの意見が、今後の環境保全活動に引き継がれ、より良い湖沼環境保全の未来につながることを期待しています。

分科会

第17回世界湖沼会議では10月16日と18日の２日間、分科会が開催されました。研究者・行政担当官・企業や市民団体、学生等が一堂に集まり、世界の湖沼及び湖沼流域で起こっている多種多様な環境問題や解決に向けた取組についての議論や意見交換の場とするという趣旨のもと、36か国、260名を超える発表者が９会場に分かれテーマ毎の発表を行いました。世界各国からの多様な事例発表にさまざまな質問や意見が飛び交い、国境を越え、世代を超え、国際交流の場として分科会は多くの貢献をしたものと思います。ILECの招聘者たちや市民団体もそれぞれの地域の湖沼問題の特色、あるいはグローバルな視点を踏まえた具体的な取組について発表しました。

また、滋賀県内からは３つの市民団体が発表しました。

「びわこ豊穣の郷」は、琵琶湖・赤野井湾の再生を目標に、滋賀県守山市内自治会の81％が会員となり、月１回の河川の整備・維持活動や、親子への環境保全学習会の実施を示しました。

「須原せせらぎの郷」は、水田で稲作と魚の生育を同時に行う『魚のゆりかご水田』として、魚道の設置や米の減農薬・無農薬栽培、環境教育や都市と農村の交流の場の提供などについての取組を紹介しました。

「ＮＰＯ法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）」は、国内湖沼セッションに続き発表しました。

JICA-ILEC研修履修者の集い

世界湖沼会議の期間中に「JICA-ILEC研修履修者の集い」としてワークショップを開催し、1995年から2014年の研修履修者を中心に10名が参加しました。

ガーナ、ケニア、チャド、タイ、アゼルバイジャン、トルコからの参加者はJICA-ILEC研修の成果を踏まえ、現在それぞれの国において取り組んでいる活動について報告しました。また、ベトナムからの参加者は、研修は履修していませんが、現在の研究活動を紹介しつつ、今後の研修に参加したいとの意向を示しました。

こうした発表に対し、元研修コースリーダーの先生方から講評が行われた後、将来におけるJICA-ILEC研修履修者のネットワーク構築およびそれを活用した研修履修者間の情報交換や交流のあり方などについて、活発な意見交換を行いました。

閉会式（いばらき霞ケ浦宣言）

５日間にわたり多くの参加者を集ったWLC17は10月19日に最終日を迎えました。午前中の会議総括では、各セッションの代表者がそれぞれの総括を発表し、最後に松井三郎世界湖沼会議企画推進委員長が、いばらき霞ヶ浦宣言の検討過程や宣言案について説明しました。

続く閉会式では大井川茨城県知事の主催者挨拶の後、いばらき霞ヶ浦宣言が朗読されました。同宣言では、湖沼の生態系サービスを衡平に享受し、次世代に引き継ぐことが重要であると明言されました。併せて、湖沼が水環境の中で極めて重要であることを認識し、世界の水を巡る議論の場において主要課題として位置づけられるよう努力する必要性が示されました。

また、ウォルター・ラストILEC科学委員長は、今回の世界湖沼会議における湖沼の主流化の動きが、2021年にセネガルで開催されるWWF9（第９回世界水フォーラム）においても、継続し拡大するように働きかけると述べました。最後にILECの竹本和彦理事長から閉式の辞として、全ての関係者へのお礼とともに、次回のメキシコにおける湖沼会議での再会を約束し、閉式となりました。

WLC17の成果物、宣言などがILECのウェブサイトに掲載されておりますので、併せてご覧ください。
https://www.ilec.or.jp/wlc/wlc-5003/

元JICA研修員からの便り

イツツェル　パトリシア　ヴェラスケス　イノホサ（メキシコ）

私は弁護士であり、メキシコ連邦政府の下部組織である全国水委員会でプロジェクト・マネージャーとして働いています。この水委員会の主な機能は次のようなものです。

①国の財産である水を個人や個々の組織のために利用したい、水資源を開発し利用したいという要求に対して精査し、正式の結論を出すこと

②国家水法を適切に施行するために、国家レベルでその法律に関する研修コースやワークショップを提供すること

③水資源の保全を確実にするために、水に関する文化を振興させ、水を大切にすることの重要性を国民に認識させることです。

私は、2017年度のJICA研修「水資源の持続可能な利用と保全のための統合的湖沼・河川・沿岸域管理」に参加した10名のうちの一人です。この研修はユニークなもので、大変価値のあるものでした。なぜなら、それは統合的湖沼流域管理（ILBM）というプラットフォームを通して、資源の持続的な管理を現実化させるための適切なアプローチであり、連続した改善という手法にもとづく行政手段だからです。すなわち、管理運営において確かな前進を得るためには、これらの６本の柱（管理・研究機関、政策（インセンティブと規制）、住民の参加、技術的な対応、情報、財源）は互いに統合されなければなりません。実行される活動の出発点である公共政策が定められる必要があります。市民や企業の参加を実現するためには、政府やその他の関係機関の支援が必要でしょう。技術的なシステムが国家に情報をもたらし、水の重要性を強く訴えることができ、そしてとりわけ、水資源の適切な管理は国家のより良い発展に貢献するのです。

この研修では、他の参加者たちとの交流を通して、多様な考え、宗教、価値観、実行、経済、文化などを知り、それらはそれぞれの参加者の国を理解する手助けとなりました。しかし、最も重要なことは、経済、政治、教育、財政面を包含した先進国になるための本当の変化へのアプローチを改良するか修正するべき要素や様相を知ることです。

現在、国家の水という言葉と法的な見地から、メキシコが直面している主たる課題は、国家水法を現実の必要性に合うように、全面的に改定すべきであるということです。すなわち、この機関の力を強くして、国家水計画を施行し、環境教育、市民の参加、会社の社会責任の明確化を進めることです。それはまた、気候変動、人口の増加、産業の必要性、地方と都市部の供給体制などを考えつつ、正当な水資源の維持管理をめざす行動にもとづいて、水資源の統合的管理に焦点を当てた政治を為すということでもあります。

したがって、法律家として私は、立法と他の政府機関とのバランスを取ることに興味を持っています。河川流域会議を活性化して、環境教育を含む教育システムを動かすこと、水の利用と開発、その管理の重要性を知り汚染を防止することが必要です。子どもたちは国の将来を担うわけですから、環境の保護は全ての人の責任であるという強い信念を持たなければなりません。メキシコの自然資源を楽しみ続けることが、全てのメキシコ人が持っている環境保全の気づきにつながっているのです。

科学委員からのメッセージ（オランダ）

鏡の中をのぞいて：社会と湖沼はどのように共存できるか

IHEデルフト水教育研究所水資源管理
教授　ピーター　ヴァン　ダー　ザーグ

人間社会と湖は昔から複雑な関係を築いてきました。

人間は、湖沼から与えられる重要な資源に依存する一方で、それを汚染し、変化させ、その価値の低下を招いています。アメリカ、アフリカ、ヨーロッパ、そしてオセアニアでも思いもよらなかった状況に追い込まれている事例は多くあります。ひん死の湖や藻類の異常繁殖で緑色になっていく湖沼などの例はよく知られています。

多くの地域社会で、以前からその事に気づいていたにも関わらず、現代社会では見て見ぬふりをして、認めるのに時間がかかるのです。こういった風潮は私達がそれを知り、改善策をとり、経済や制度が持続可能な発展への道に向けて順応していくことを妨げています。これに関して、オランダでのおもしろい実例があります。

◆オランダとその湖沼への依存

オランダはライン川、ムーズ川、スヘルデ川の河口から成り立ち、淡水、汽水、塩水に囲まれています。人々はその水域をコントロールしようと歴史的に取り組んできました。高波による河川の氾濫を防ぐために、これらの水域を海から切り離し、それらのいくつかを干拓地に変え、残った淡水湖沼の水質改善を試み、さらに最近は干拓地を逆に自然に戻したりもしています。

オランダの水に関する知識は高く評価されがちですが、計画的、論理的に生み出されたものではありません。多くは洪水や汚染災害の様な問題が無視できないレベルに至る危機を契機にして生み出されたもので、“行動から学ぶ”形で進化してきました。一例として、肥よくで豊かな生物多様性を持つ汽水湖の河口を、高波から守るために完全に切り離すことにより、不活性で死んだような淡水を生み出す予想外の結果となりました。これが社会の危機感、政治的な議論、技術的実験、革新的な解決法の模索を触発し、新しい知識が生まれました。

同様に、多い人口と集約的農業は硝酸塩とリン酸塩による面源汚染を引き起こしました。浅い湖沼の富栄養化は社会問題化しましたが、それを元の状態に戻すことは予想以上に困難でした。研究の結果、富栄養化した浅い淡水システムは安定状態に導き得るとされましたが（Scheffer, 1989）、その見解によって生態系機能の回復という課題とともに社会の期待のハードルも上がることになりました。この新しい洞察が出されてから30年経った現在、オランダやヨーロッパ諸国は、多くの法律や規制の制定にも関わらず、未だに窒素とリンの汚染を減らすのに苦労しています。（図１）

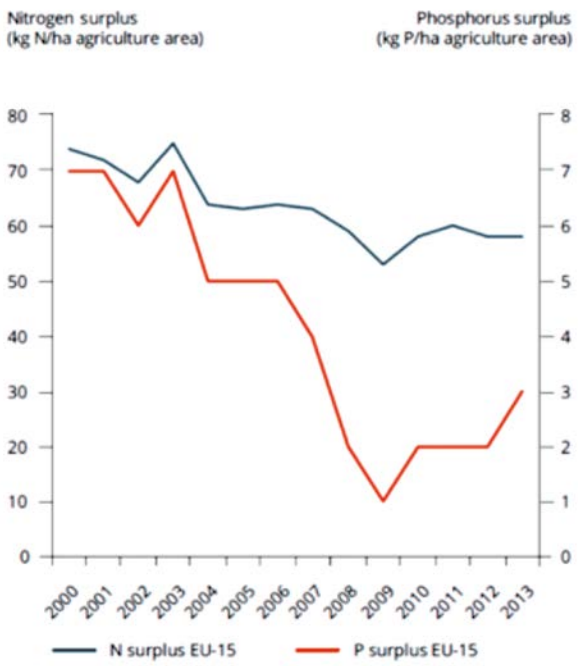
◆湖沼の社会水文学

湖沼は社会を映す鏡のようです。湖沼の状態は社会の状態とその価値観を表す指標です。したがって、湖沼をのぞきこめば、社会の状況が映し出されるのです。

特定の湖沼とそれを擁する社会との間に出来上がる関係は複雑になり得ます。湖沼は重要な利益を継続的に生み出す貴重な資源であり、その恩恵の享受と配分は、その地の文化に触発され、政治的意向に左右されます。湖沼は、時間差やヒステリシスなどが原因で、ショック事象、ストレスの増減に対して直ぐに応答しません。こういったことが、今後の方向性に対する様々な異なった見解、相容れない解釈、政治的・科学的論争などを引き起こすことがあります。

このように、湖沼と社会との間の多面的な関係は、自然と社会との関係を理解するだけでなく、この事が知識を生み出す過程にどう影響を与えるのかといった疑問に対しても、大変魅力的な研究対象となります。したがって、湖沼の“社会水文学”（Sivapalan 他., 2012）という新しい研究分野を発展させることは価値があります。

こうした研究からこんな問いかけができるでしょう：このような繊細なシステムの持続可能な発展の道程とはどういったものになるのか？また社会はどの様にそれを認識することが出来るのか？ヨーロッパの浅い湖沼以外の湖沼に対してどういった教訓をあたえることができるのか、更には効果的な政策とはどういったものになるのか？以上の趣旨で言えば、流出河川をもたない内陸湖沼である砂漠湖は、人的介入に対し脆弱であるが故に繊細な鏡となるという意味で、特に興味深い研究対象です。



（図１）15のEU諸国の農地における無機肥料の使用による余剰栄養塩の動向（出典： EEA, 2018; p. 69）

国際コロキアム（世界湖沼会議サイドイベント）

ILECでは10月14日にWLC17のサイドイベントとして国際コロキアムを主催しました。この会議は、「湖沼を世界の水議論の主要課題に」をテーマとし、国際機関や世界各国の政府機関等16か国から50名以上の参加を得て開催しました。

コロキアムでは、国内外の様々な組織の専門家よりアフリカ、東南アジア、ヨーロッパなどの地域及び国際レベルでの統合的湖沼流域管理（ILBM）の応用例、世界の水問題への主流化に向けての事例発表がありました。

「湖沼は地上に存在する淡水の90％以上を占め、人間の社会と生物において重要な資源の供給源であるにもかかわらず、先進国・途上国のどちらにおいても環境は深刻に悪化している。また、世界的な水問題の議論からは忘れられがちである。」という認識共有に基づいて、参加者全体でのディスカッションが行われ、湖沼を世界的な水問題の主要課題とするために、以下のような行動目標を提案しました。

◆湖沼の問題を地域レベルから、国家レベルに引き上げられるように努力する。

◆湖沼の問題を世界レベルにするためのプラットフォームを立ち上げる。

◆世界規模で、湖沼のデータ、情報、知識の共有を強化するための努力を惜しまない。

◆世界的な様々な分野の水問題で、湖沼を主要課題とすることをそれぞれの責務とする。

ILEC科学委員会総会を開催

ILEC科学委員会では、WLC17期間中、つくばにて本年度の総会を行いました。当委員会は、世界の様々な地域で湖沼流域管理と保全に携わる研究者や、行政官等で構成され、ILECの国際的な活動を主導しています。今年度は、オランダのピーター ヴァン ダー ザーグ教授を新委員として迎えての会合となりました。

総会では、ILECの2022年への中期展望で示された科学委員会活動の分散型世界的展開、ILEC支援グループの強化、国際機関や研修履修者との連携などを共有しました。また、2019年４月よりの第13期科学委員会の体制について議論を重ねました。そして各委員からはそれぞれの地域における活動の報告が行われました。

アジアでは、ネパール・ポカラでの国際湖沼会議、ドバイでのラムサールCOP13におけるWLC17の成果報告、南米地域では、ブラジリアでの第8回世界水フォーラム

（WWF8）での発表、アフリカ地域では、ケニアの国家水戦略の湖沼管理にILBMを反映するための活動および西アフリカの専門家による湖沼流域管理の改善検討の開始が報告されました。今後も世界中の地域でILECの様々なプロジェクトを先導してくれることを期待しています。

ILECはJICA理事長賞を受賞

国際協力事業を通じて開発途上国の人材育成や社会発展に多大な貢献をした個人・団体を表彰する第14回JICA理事長賞表彰式が、平成30年10月1日にJICA市ヶ谷ビル国際会議場にて行われ、49個人・団体（海外20、日本29）が表彰されました。

ILECは1991年より27年間に亘りJICAとともに湖沼管理保全研修等により68か国460名以上の人材育成をした功績によりJICA理事長賞を受賞しました。

ILECの活動概要（2018年度）

●4月	8～25日	グリーン成長に資するハロン湾支援プロジェクトに参加（クアンニン省）
	25日	インドネシア環境林業省使節団が環境省、茨城県、滋賀県、ILEC等を訪問
●5月	7日	関西アーバン銀行よりeco定期預金の寄付を拝受（大津市）**【写真❶】**
	11～13日	ポカラ世界湖沼会議に出席（ネパール）
	24～25日	世界銀行、地球環境ファシリティー（GEF）、国連環境計画（UNEP）を訪問、ILBMなどについて協議（ワシントンD.C.）
	25日	近畿労働金庫より社会貢献預金すまいるの寄付を拝受（大津市）
●6月	23日	ラムサールびわっこ大使 第1回事前学習会を実施（野洲市）
	25～28日	マレーシア・テレンガヌ州の使節団がILECや関係施設を来訪
●7月	9～13日	知識ベース“LAKES”のワークショップをインドネシアで開催（ボゴール・ジャカルタ）
	15日	びわ湖まるっと親子セミナーを近畿ろうきんと共催（草津市）
	26日	ラムサールびわっこ大使第２回事前学習会を実施（彦根市・長浜市）
●8月	20～21日	ケニア政府と国家水戦略へのILBM反映を検証する会議を開催（ナイロビ・ケニア）**【写真❷】**
	22日	ラムサールびわっこ大使世代間交流プログラムを実施（草津市）
	25日～	クアンニン省ハロン湾地域のグリーン成長推進プロジェクト本邦研修を実施（大津市・甲賀市・草津市、９/２まで）
●9月	16日	ラムサールびわっこ大使第３回事前学習会を実施（野洲市・草津市）**【写真❸】**
	26～29日	第２回MEMS・センサーシステム国際ワークショップに出席（ホーチミン、ベトナム）
●10月	1日	JICA理事長賞を授賞（新宿区）
	14日	ラムサールびわっこ大使が「第17回世界湖沼会議学生会議」に参加（つくば市）
	14日	国際コロキアム開催（つくば市）
	15～19日	第17回世界湖沼会議開催（つくば市）
	17日	JICA-ILEC研修履修者の集い開催（つくば市）
	17～19日	びわ湖環境ビジネスメッセ2018に出展（長浜市）**【写真❹】**
	19日	ILEC 科学委員会総会開催（つくば市）
	21日	海外の水辺保全専門家と市民団体との活動交流ミーティングを開催（草津市）
	25日～	JICA委託研修第３回「水資源の持続可能な利用と保全のための統合的湖沼・河川・沿岸流域管理」を開講（草津市、12/21まで）**【写真❺】**
	26日～	ラムサール条約COP13において世界湖沼会議の成果報告のためのサイドイベントを開催（ドバイ）
●11月	12日	滋賀県立守山高等学校の生徒、教師17名がILECを訪問し、JICA研修員と交流（草津市）
●12月	6日	JICA研修員との企業技術交流会を実施（草津市）
	9日	ラムサールびわっこ大使が「淡海こどもエコクラブ活動交流会」に参加（草津市）
	20日	ILEC 活動関係者意見交換会開催（大津市）

写真❶

写真❷

写真❸

写真❹

写真❺

写真❻

2019年

●1月	9～10日	新しいケニア国家湖沼流域管理戦略について地方関係者の意見を聴取（キスム、ケニア）
	10～24日	グリーン成長に資するハロン湾支援プロジェクトに参加（クアンニン省）
	11日	UN Environmentと年次会議を開催（ナイロビ、ケニア）
	16～17日	西アフリカの湖沼環境課題を討議するワークショップを実施（アビジャン、コートジボアール）**【写真❻】**
	23～30日	日本・アジア青少年サイエンス交流事業を実施（大津市・草津市・近江八幡市）
●2月	24日	ラムサールびわっこ大使 活動報告会を実施（草津市）
	27日～	知識ベース“LAKES”のワークショップをILECで開催（草津市、３/１まで）

第18回世界湖沼会議は2020年にメキシコで開催

次回の第18回世界湖沼会議（WLC18）は2020年秋にメキシコのグアナファトで開催される事がグアナファト大学のセルジオ・シルバ副学長より発表されました。

ラテンアメリカでは、1997年のアルゼンチン以来23年ぶりの開催となります。メキシコは湖面に多くの島々が浮かび、風光明媚なメキシコ最大のチャパラ湖、干拓が進み著しく縮小してしまったテスココ湖、農業用に造られた大きく美しい人口ラグーンであるユリリア湖など特徴的な湖沼を有しています。また古くよりアステカ文明やマヤ文明が発達し、34もの世界遺産が登録されている歴史のある国です。

グアナファトはメキシコ中部に位置し、コロニアル調のカラフルな街並みは、メキシコで最も美しい街と言われ、世界遺産にもなっています。

会議主催者となるグアナファト大学は、ラテンアメリカ最古の大学の一つであり、18世紀に建てられた白亜の校舎を有していることで有名です。

詳細はILECのウェブサイトにて随時お知らせいたします。この魅力的な地での、次回湖沼会議に皆さまぜひご参加ください。

ILEC 新役員紹介（平成30年4月1日付け）

評議員	髙砂利夫 評議員が退任され、滋賀県琵琶湖環境部長の廣脇正機 様が評議員に就任されました。
理事	髙木浩文 理事が退任され、滋賀県琵琶湖環境部環境政策課長の島戸克浩 様が理事に就任されました。

ご寄付・ご協力ありがとうございます！

●2018年度に寄付のご協力をいただいております企業・団体様のご紹介（順不同）

三井住友銀行グループ 関西アーバン銀行
はたらくあなたへ、笑顔を届けに 近畿ろうきん
Cedyna
まっすぐ未来 滋賀中央信用金庫
湖東信用金庫
長浜信用金庫
株式会社 三雅

●2018年度に賛助会員（法人）として会費をいただきました企業・団体様のご紹介
（一口 3万円：二口以上の会員様のみ）（順不同）

三井住友銀行グループ 関西アーバン銀行
HORIBA Advanced Techno
HIYOSHI Ecological Services
OECC

ILECの活動へのご理解とご支援を賜りたく、寄付のご協力および賛助会員へのご入会をお願いしております。ILECへの寄付金、賛助会費には税制上の優遇措置が適用されます。ホームページにてクレジットカード決済での申込みも受け付けております。
詳しくは https://www.ilec.or.jp/support/ をご覧ください。

INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION (ILEC)

ILEC

— 事務局 —
〒525-0001 滋賀県草津市下物町1091 公益財団法人 国際湖沼環境委員会
Tel: 077-568-4567 / Fax: 077-568-4568 / E-mail: infoilec@ilec.or.jp
Website: www.ilec.or.jp / Facebook: www.facebook.com/ilec.japanese

＊本ニュースレター最新号、バックナンバーは上記の当財団ホームページでもご覧になれます。